

哲学者に学ぶ、問題解決のための視点のカタログ

加藤良一 令和3年(2021)11月18日

哲学者であり教育家でもあるモラリスト・作家の^{おおたけい}大竹稽氏の「**哲学者に学ぶ、問題解決のための視点のカタログ**」という本が2021年11月26日に出版される。大竹氏は、ミシェル・ド・モンテーニュの『エッセー』からエッセンスを抜き出して訳した、その名も「**超訳 モンテーニュ 中庸の教え**」を2019年に出版している。この著書についてはつぎのサイトにレビューしてあるので、参考までにご覧いただければ大竹氏の狙いがわかるのではないだろうか。 http://rkato.sakura.ne.jp/kotoba/k48_choyaku_montaigne.html

「**哲学者に学ぶ、問題解決のための視点のカタログ**」について、AMAZONの著者による紹介欄には以下のように書かれている。

哲学を学ばな。哲学しろ。

世界が大きく変わろうとしている今、哲学こそ、探していた最高の問題解決の技法！

近代以降デカルトからデリダまで33人の哲学者たちによる50の視点

哲学者に学べ、でも、哲学を学ばな！

つまり、哲学者たちの視点を学んで、その視点から、世界を見直してみよう！ということだ。

世界とは、社会であり、あなた自身の内側でもある。哲学の大全的な本は多いが、その多くは、学説について学ぶものであって、読者が、自ら哲学する、すなわち、世界をそれまでになかった視点から見て、再定義するためのものではない。

でも、たとえば、ヘーゲルの弁証法についていくら語れたとしても、弁証法を用いて、いままさに、あなたが抱えている仕事の課題、人生の課題、恋愛の課題の糸口を見つけることが出来ないとしたら、一体何のための哲学か?!

これに対し、本書は、読者が哲学者が見いだした視点を現実の課題解決に用いるためのものである。一般のビジネス書における問題解決技法集のようなハウツー書ではない。それらがアプリケーションなら、本書は、問題解決のさまざまなOSを示し、読者がみずから、アプリケーションをつくりだしていくためのものといえる。

哲学の難点は、正確さと差別化を期するあまり、用語が難解になりがちなことだ。しかし、その訴えるところを知れば、深い共感とともに、あらたな視点を手にすることができる



るだろう。

そして、いままさにわたしたちがかかえる大小さまざまな問題—仕事上の、あるいは人間関係上の、あるいは、自己成長に関する問題はいうまでもなく、いまの世界の大きな課題、すなわち現在の資本主義にかわる新しい世界にむけてのソリューションを見いだすこともできるかもしれない。

「哲学を学ぶな。哲学しろ。」というキャッチコピーは、なかなか魅力的だ。哲学者木田元^{げん}氏の主張にも通じる気がする。

木田氏の編纂による『日本の名随筆』別巻92<哲学>に、「反哲学のすすめ」と題する木田氏のエッセイがある。

そこでは、つぎのように西洋哲学のおかしさを指摘し、それまで分からなかったこと、分からないのに分かったふりをしていたことを恥じている。

デカルトの考えている〈理性〉は、たしかに人間のうちにあるが、人間のものではなく、神の理性の派出所か出張所のようなものなのである。キリスト教の世界創造論では、神が世界を創造したとされる。むろん神は世界をデタラメに作ったりはしない。神はおのれの理性にもとづいて世界を創造する。だからこそ、世界は合理的にできており、摂理に支配されているのだ。そして、この世界創造の最後の段階で神は人間を創造し、その人間に自分の理性の縮小物^{ミニチュア}のような理性をそなえつけた。つまり、それを「公平に配分した」のだ。つまり、人間の理性は人間のうちにあっても超自然的な由来のものであり、世界創造の設計図の写しのようなものなのである。だからこそ人間は、感覚機能のような自然的・生物的機能を働かせたりせず、理性だけをうまく働かせれば、世界の合理的な存在構造を知ることができる、という理屈である。

特殊な世界創造論を前提にしなければ成り立たないこんな〈理性〉概念が、われわれに分かるわけではない。分からなくて当然なのである。しかし、日本の哲学研究者は、永いあいだ西洋の知、とくに〈哲学〉こそ人類普遍の知なんだから、それを分からないのは恥しいことだ、せめて分かったふりをしなければ、とやってきたようである。(中略)

徹底して〈自然〉のなかで生き、考えてきたわれわれ日本人に、こうした超自然的・形而上学的な考え方がうまく呑みこめるはずはない。当然おかしいと思うべきであった。それに、よく考えてみれば、こんな考え方がおかしいということは、ヨーロッパでもニーチェ以来の現代の哲学者たちがさんざん言ってきたことである。彼らは、この巨大な技術文明を生み出し、明らかに先行きの見えてきた西洋文化を、その基本的な形声原理である〈形而上学〉にまで遡って根本から批判しようとしてきたのだ。彼らにとっても、こんなものの考え方は反自然的であり、不自然なのであ

る。実は私も、ハイデガーやメルロ＝ポンティを読んでいて、やっと西洋哲学のおかしさを正直に口に出せるようになったのである。

現代の哲学者は、このような〈哲学〉の解体を目指している。ハイデガーはそれを〈存在の回想〉と呼び、メルロ＝ポンティは〈反哲学〉と呼んでいる。このような解体作業であれば、われわれ日本人にも取り組みやすいし、むしろ西洋の永い伝統というしがらみがないぶん有利である、と木田氏は述べている。このような観点から「**哲学者に学ぶ、問題解決のための視点のカタログ**」を読んでみたいと思う。

【目次】

序章「見ることは、世界と関係を結び、世界を変えていくことだ」

第1章 整理の視点

- 1 パスカルの視点 幾何学「なぜ数学を学ぶのか？」
 - 2 ソシュールの視点 価値「モテ顔は時代によって変わる？」
 - 3 デカルトの視点 機械「人間はアンドロイドになれるか？」
 - 4 デリダの視点 ロゴス中心主義「なぜ会話力が重視されるのか？」
 - 5 バルトの視点 エクリチュール「なぜ世界が日本アニメに注目するのか？」
 - 6 ルソーの視点 社会契約「国が先か？国民が先か？」
 - 7 マルセルの視点 実存「コロナ禍後のあり方は？」
- コラム アダム・スミスが見た未来「資本主義に生きる人間」

第2章 解体の視点

- 1 モンテーニュの視点 懐疑「判断中止は思考停止か？」
 - 2 ル・ボンの視点 群衆「SNSは国を動かすのか？」
 - 3 ベンヤミンの視点 アウラ「わざわざルーヴル美術館に行くか？」
 - 4 バタイユの視点 有用性「なぜスマートフォンはバージョンアップし続けるのか？」
 - 5 フーコーの視点 パノプティコン「いずれ二十四時間監視される？」
 - 6 ソシュールの視点 忖意性「なぜ境界問題は難しいのか？」
 - 7 ドゥルーズの視点 差異「みんなちがってみんないいのか、ダメなのか？」
 - 8 レヴィナスの視点 他者の顔「顔なしはコミュニケーションできるのか？」
- コラム ヘーゲルが見た未来「歴史と自由」

第3章 探求の視点

- 1 カミュの視点 反抗「なぜ権威は胡散臭いのか？」
 - 2 フーコーの視点 エピステーメ「アイディアはどこから生まれるのか？」
 - 3 サルトルの視点 状況「新型コロナウイルスに先手は打てないのか？」
 - 4 ハイデggerの視点 ダーザイン「なぜ死ぬほど働きたいのか？」
 - 5 ベルクソンの視点 運動「人生成功の方程式はあるのか？」
 - 6 メルロー＝ポンティの視点 身体「身体か精神か、それは問題か？」
 - 7 アーレントの視点 活動「フリーターではダメか？」
- コラム マルクスが見た未来「家畜人間」

第4章 発展の視点

- 1 ソシュールの視点 文脈「なぜ付度はダメなのか？」
 - 2 サルトルの視点 自由「自由が先か、不自由が先か、それが問題だ」
 - 3 クロソウスキーの視点 シミュラクル『『私』の値段はいくらだろうか？』
 - 4 ジャンケレヴィッチの視点 道徳「道徳の先生は道徳的な人なのか？」
 - 5 ブランショの視点 友愛「共に生きるとは?1」
 - 6 ナンシーの視点 死「共に生きるとは?2」
 - 7 ラカンの視点 大文字の他者「無意識ってどんな世界？」
 - 8 ボーヴォワールの視点 自己『『自分らしく』は何を意味するか？』
- コラム リクールが見た未来「アイデンティティの受苦」

第5章 再生の視点

- 1 メルロー=ポンティの視点 眼差し「どこ見てんのよ？」
 - 2 サルトルの視点 投企「人間に未来はあるのか？」
 - 3 ロラン・バルトの視点 作者の死「これを書いたのは誰？」
 - 4 ドゥルーズの視点 ナンセンス「できないことをするのはナンセンスか？」
 - 5 バタイユの視点 エロス「なぜアダルトビデオに芸術性がないのか？」
 - 6 ベルクソンの視点 イマージュ『『何でも見える鏡』があったら何を見る？』
 - 7 デリダの視点 差延「異文化コミュニケーション能力って何？」
- コラム リオタールが見た未来「アリ人間の悲惨さ」

第6章 創造の視点

- 1 カイヨワの視点 遊び「遊んでる？」
 - 2 パスカルの視点 繊細さ「なぜアートは必修教科になれないのか？」
 - 3 フーコーの視点 人間「人間に賞味期限はあるのか？」
 - 4 サルトルの視点 高邁さ「非常事態を超える精神とは？」
 - 5 ベルクソンの視点 愛「真実の愛にふさわしい人とは？」
 - 6 バタイユの視点 至高性「なぜ世界が禅に注目するのか？」
 - 7 マルセルの視点 誠実さ「愛し、敬い、慈しむことを誓いますか？」
- コラム ボードリヤールが見た未来「モノに操作される人間」

おわりに(スティーブ・コルベユ)

【BOW BOOKS 004】 単行本 - 2021/11/26

大竹 穰 (著), [スティーブ・コルベユ](#) (著), 発行元:[BOW&PARTNERS](#)